

## 2・戦後ににおける

### 「いえ」と「むら」の構造的変化

宇都宮市中平出集落を事例として

春日文雄（宇都宮大学）

本報告は、宇都宮市中平出集落における一九五〇年と一九七五年の二五年間に亘った期間に「いえ」と、「いえ」相互によつてとり結ばれている「むら」との関係が、どのような構造的变化をとげたか、それがまた、どのような運動をしつつあるのかをあきらかにしようとするものである。

(1) 中平出集落は、一九五〇年当時四〇戸の農家と二戸の非農家計四二戸によって構成されていた水田を中心とした「むら」である。この「むら」の農民の耕作する水田(五〇ha)は、鬼怒川に近海し、県内で有数の高い反収をあげ、またその五〇%の面積には大・小麦が裏作として作付されていた。この裏作の問題は、川辺の「むら」にかかわらず灌漑用水の末端にあたるという条件の悪さとあいまつて、春の労働関係を規定した。

(2) 以上の条件によって短期間に麦刈り、田植をすまなければならず、また当時の畜力耕段階では労働力一人当たり約五反七畝が耕作の限界である。それが協業、分業によって結合した家族内の生産における労働の共同組織の規模を決定し、さらに、労働力の再生産を

軸とした扶養の共同の単位としての家族の規模をきめる要因をなしていた。

(3) また、農業の生産労働は家族内の共同組織のみで完了するものではなく、「いえ」相互の間で「結い作業」、「手伝い労働」、「臨時雇労」等の労働関係を補完条件とすることによってはじめて完了することができた。こうした労働力の交換、あるいは雇用関係が、どのような「いえ」の相互関係をもつたもの同志の間でおこなわれるのか、またその交換はどのような質のものであったかが問題となる。

(4) この時点では旧地主・小作関係・本分家関係(含擬制的分家)とならんで畜力の貸借関係がその通路をなしていいたことをここで指摘しておくにとどめるが、このような生産の労働過程における交換、生産手段の貸借関係が一九五〇年段階における「むら」関係を規定する条件であった。

(5) 一九五〇年時点での「いえ」の構造、あるいは「いえ」相互関係としての「むら」の構造が農業生産力段階に規定されたそれであつた。ことばをかえるなら農業内部から生み出されたそれであるとするならば、一九六〇年以降における変化は、機械耕に発展するという農業内部の動きを無視するものではないが、農業外の産業構造の変化によつてもたらされたものである。

(6) 農家労働力の流出は、家族労働の共同組織を崩しながら、それを縮少させ、さらに家族規模を縮少させるという量的変化をあたえたが、それは単に量的変化にとどまらず、「いえ」の構造に質的変化

をもあたえている。農業生産における労働の共同組織を前提としていた扶養の共同も、賃労働収入によって支持されている層が広範に生み出されている。こうした農民家族は必然的に賃金水準によって家族規模を外から規定されるというメカニズムをあたえられてくる。

(7)「いえ」の量的、質的な変化はさらに、「いえ」相互の関係をも当然のことながら変質させていく。生産手段の利用関係においても賃耕に代表されるような貨幣に媒介される経済関係におきかえられていきつつある。